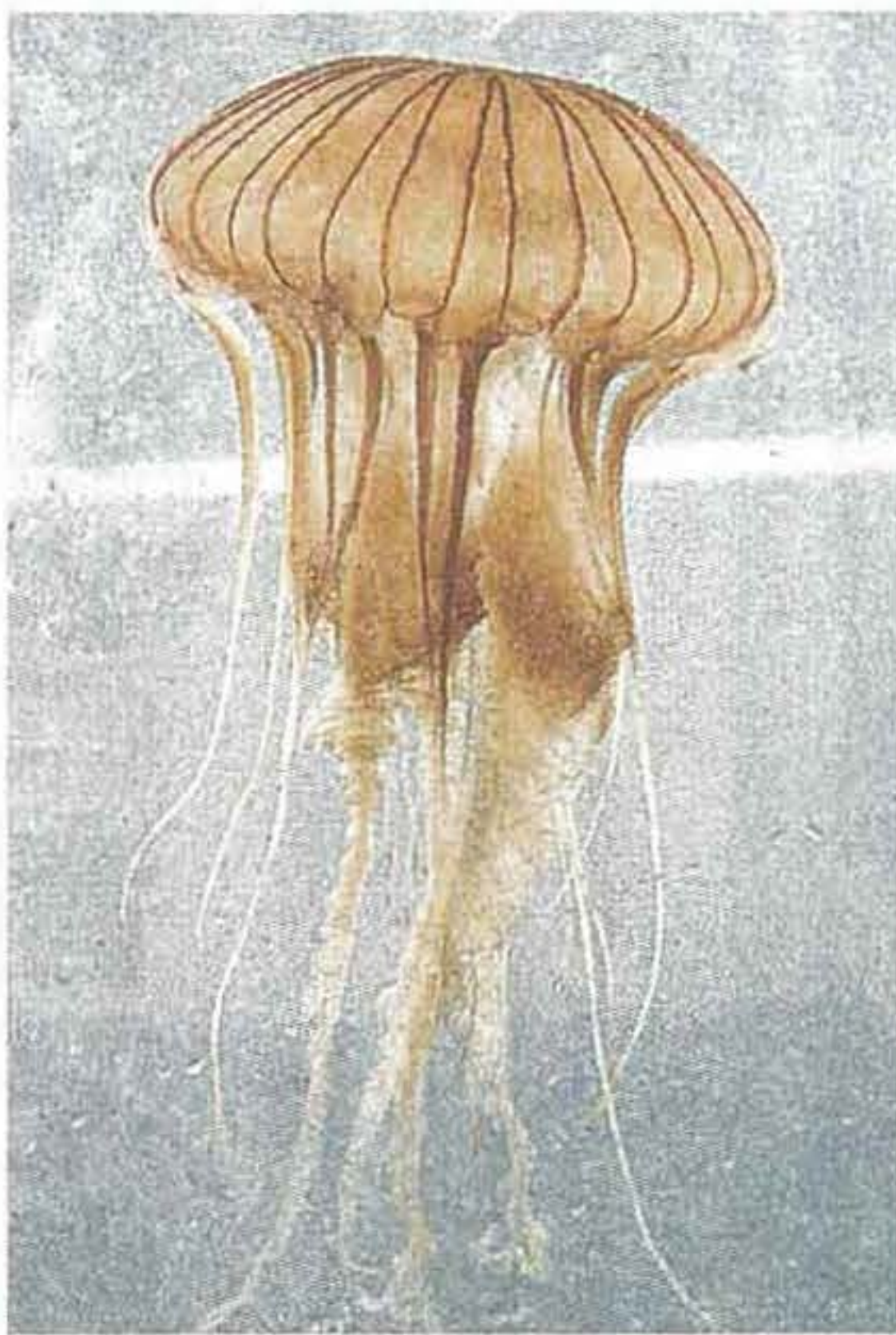


アカクラゲ



毒の強いアカクラゲ

久保田 信

13



3月になって京都大学瀬戸臨海実験所構内の北浜海岸や瀬戸漁港でアカクラゲが出現し始めた。傘をパクリパクリと拍動させ、優雅に漂っている。毎年このころに姿を見せる大型の鉢クラゲ類である。今は小ぶりで大人のこぶしくらいしかないが、成長すると

傘径が20センチに達する。32本の赤い筋が傘の頂上から縁に向かって放射状にあるのが特徴である。あでやかなクラゲで、おのおの筋は根元で二股に分かれて伸びている。傘の縁には、規則正しく配置されて、小さくて細長い感覚器が8個ある。それぞれが眼点や平衡石から構成されているので、角度によってはキラリと光って見える。

傘の内側の中央から垂れ下がる口腕は長い。口腕は4本のレース状となって、傘の直径の何十倍にも伸ばせる。傘の縁からは多数のひも状の触手が伸びている。これらすべてに一瞬でも触れた小魚などはいちころである。無数の刺胞(しほう)から発射される強力な毒液の注入により、瞬時に体がしびれて動けなくなる。毒は強く、人間にさえも刺傷を及ぼすほどの猛毒である。

アカクラゲは毒が強い種類と知ってか、小魚たちがその危ない口腕の周りに群がって、いっしょに行動していることもある。さぞがし強力なボディーガードなのだろう。たまには、ウチワエビの幼生が傘の上にちゃっかり乗っかって、ヒッチハイカーとして旅を続けることもある。

アカクラゲは日本沿岸のどこでも見られ、生活史もよく分かっている。単体のポリプは、時期が来るとその体を多数に切り分け、クラゲの幼体であるエフィラを多数つくる。最後に残った個々のポリプの基部の塊は、その後は元に戻り、引き続いて分身のポリプを無性生殖でどんどんつくっていく。

(京都大学准教授)